

春がくる前

小川未明

青空文庫

さびしい野原のほらの中に一本ほんの木立こだちがありました。見渡みわたすかぎり、あたりは、まだ一面めんに真まつ白しろに雪ゆきが積つもっていました。そして、寒さむい風かぜが、葉はの落おちつくしてしまつた枝えだを吹ふくのよりほかに、聞きこえるものもなかつたのです。

木きは、こうして毎日まいにち、長ながい寒さむい冬ふゆの間あいだ、さびしいのを我慢がまんしていました。それにつけても、過すぎ去さつた春はる、夏なつ、秋あきの間あいだのいろいろ楽たのしかつたこと、おもしろかつたことを思おもひ出だしていたのであります。

その中うちでも、くびのまわりの赤あかい鳥とりが、枝えだに巢すを造つくつて、三羽ばの雛ひなをかえして、三羽ばの雛ひなが仲なよく枝えだから枝えだへ飛とびうつつていましたのを、木きは忘わすれることができませんでした。

「いまごろは、あの親おや子の鳥とりはどこへいったらう。さだめし暖あたたかな土とち地ちへいつて、ああして、楽たのしくさえずつたり、飛とびまわつたりしているであらう。そして、また、こちらが春はるになつて暖あたたかになつたら、忘わすれずにやってくるかもしれない。そのときは、もう三羽ばとも雛ひな鳥どりは、大おほきくなつていることだらう。」と、木きは思おもいました。

こうして、木立こだちは、毎日まいにち、風かぜの音おとを聞きいて、白しろい雲くもを見みつめるよりほかになかつたので、さびしく、退たい屈くつでなりませんでした。

「ああ、早く春がきてくれればいい。」と、独りで野原の中で脊伸びをして、あくびをしましても、だれもそばで聞いているものもなかったのです。

しかるに、ある日のこと、一羽の小さなうぐいすがどこからか飛んできて、この木のこずえに止まりました。

木は、さつそく、このうぐいすに話しかけたのであります。

「うぐいすさん、見れば、まだおまえさんはお若いが、この寒いのにどこへおゆきなさるのですか。そして、どこからおいでなさいました。」と、木立は、うぐいすに問うたのであります。

すると、年こそ幼いが、りこうそうなうぐいすは、木のいうことを頭を傾けて聞いていました。

「私は、あちらのふもとのやぶの中からやってきました。私は、お母さんといっしよに、そのやぶの中で暮らしました。いい香いのする花が咲いていました。また赤い実がなっていました。それは、いいところでした。私は、お母さんといっしよなら、けっしてよそへはゆきたいなどと思うことはありません。」

けれど、平常お母さんは、私に向かつて、町の方へいってはならない、おまえのような

よい子がいったら、きつと人間が捕まえて、かごの中に入れてしまおうだろう。これまで、このやぶから出たもので、いくたり人間に捕まって帰ってこないものがあるかしれない。しかし人間は殺すのではない。かえつて、うまいものを食べさせ、暖かにして、ときには水も浴びさせてくれて、大事にしてくれる。けれど、もう一生帰ってくる事ができないのだから、町の方へいつてはならないといわれました。

私は、なんだか町を一度見たくてしかたがありません。たとえば、いくら見たくても、お母さんを残してゆく気は起こらなかったのです。

その私の大事な、そして、このうえなく私をかわいがってくださいましたお母さんが、この秋、病気で死んでしまわれたのです。私は、気が狂いそうでした。毎日、悲しくて泣きあかしました。そのうちに冬がきて雪が降りました。しかし、私は、長い間棲んだ、そのやぶを離れる気はしなかったのですが、このごろになって、せめては、一度なりと町へいつて、その景色をながめたり、また私どもの仲間の生活を見てきたいものだと思つて、いま、旅立つ途中にあるのでございます。」と、若いうぐいすは、目に涙をためて答えました。

木は、しばらく、黙つて聞いていましたが、

「おまえさんは、幼いけれど、なかなかしつかりしていなさる。それなら、町へいっても人間に捕らえられるようなことはあるまいから、見てきなさるがいい。いくらお友だちが、いい生活をしてもうらやみなさるな。帰りには、またきつと立ち寄ってください。」と、木はいいました。

「そんなら、いつてきます。」といって、若いうぐいすは、灰色の空をあちらへと、町の方をさして姿を消してしまったのであります。

また、木は独りぼつちとなりました。

どこを見ても真っ白な雪が積もっていました。そして、絶えず寒い風が吹いて、身震いせずにはいられなかつたのです。夜になると、星の光がものすごく頭の上を照らしました。明くる日から、木は、幼いうぐいすのことが気にかかつてなりませんでした。無事でしょうか、人間に捕まりはしないかと、木は年をとっていましたので、いろいろのことが案じられてなりませんでした。

うぐいすは、町にいつて、高い煙突を見ました。車のゆくのを見ました。火の見やぐらを見ました。いろいろなものを見ました。そして、垣根や、軒端に身を隠して、仲間のいる家のをぞきました。すると障子のはまった箱の中に入つて、仲間がうたっています。

た。けれど、その箱はばかに狭く窮屈であつたのです。なんだか、そのなき声に、聞き覚えがあつたようでした。もう気が詰まるように感じて、そんなことをも考える余裕もなく、ふたたび野原の方を指して飛んできました。

「ただいま、帰りました。」といつて、うぐいすは、木立に止まりました。

木は、うぐいすの帰つてきたのを喜んで、

「町は、どんなでした。」と聞きました。

うぐいすは、これに答えて、

「たとえ町の生活がどんなによくても、私はやはり、お母さんと暮らした、山の生活がいちばん好きです。」といいました。

うぐいすは、山のやぶへ帰るときに、一声いい音色を出してなきました。野原も、森

も、木立はもちろんのこと、その音色に耳を傾けました。そして、彼らは、一時に長い眠りから呼びさまされたように、感心したのでありました。

二、三日すると、春が、この野原にも、木立にも、森にもやってきたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「まなびの友」

1921（大正10）年3月

※表題は底本では、「春《はる》がくる前《まえ》」となっています。

※初出時の表題は「春が来る前」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春がくる前

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>